北條五代記

巻十　終

北條五代記巻第十目録

小田原籠城捨曲輪へ攻入事
兵法勝負の事
三浦三崎の地気まぐれたる事ども
相模宝蔵山旧跡の事
笠原新六郎氏政へ逆心の事
定林坊一ヶ平の事
北條氏政没落の事
犬の草を海の中に捨る事
老て小童と成事

御數寄屋方

北條五代記巻十

○小田原籠城捨曲輪へ攻入事

見しは昔秀吉公小田原の城を大軍をもつて責るさいに。惣構よ大鉄炮をうけ昼夜をもなりやまず。城の構をふかくして要害かたし。天下の武士集まりぬれども急に責かねんと。智略をめぐらされしは。惣構の出曲輪の里が内に一所と云所をうかへ。をもはよばせめける敵なし。小坂山の攻口へ土穴を堀へて矢倉を打出ましへ土乃底よりほりくる是を益なし。箱根に三浦住人小田原に籠城まで。

東方芦子門濱手の角矢倉と相ともに。是より
一町計上迄が中への外に桜門寺と名付一町四方
程ところ高き地形あり。是ハ昔寺の跡なるによ
りてかく名付延。是より又塀を延土手をつき
塀をかけ。城の内より橋を一ツ渡し。是を出曲輪と
名付山角上野守　嫡男巳之郎右衛門尉次男左衛門
丈父子三人の持口の内にかゝり総て秀吉公ハ山田
弟へ乞ひ其の所ゆへ此出曲輪ほどく益なし迚。
塀を積里ほどくづる橋も亳し橋をかけとき
壹ハ城中より出ゆく土井に鉄炮をかけ避もあつ。

此芦子門ありて濱の家康公のせめ口なり。此捨
曲輪より西て井伊兵部少輔直政せめらるなり。
兵部少輔此をて曲輪をとらんとせしに塀の
うめ草とて聞ゆ。六月廿又日乃。和泉淡路
もてよ塀をとらんとせし城中より鉄炮を放
ちけ。矢石をびた雨に。天地震動して鉄炮に
当て死する者の数を知らず。二時計程
堀口又六ゆるうめ。捨曲輪へとりいりけり。泉州
らかして。前後左右をかも乙にとびて其塀に
つかひへとりしに。庭にとりつきし者。ちりさき

敵まてよせしを防がまはらんが為。逆茂木を引
破り。築地へ入れかゞり。堺一条中にふ為るぞてせめ
そゝうふ事もとことつるかへくりて。敵は流ようり
かり。城内女は舞を焼ぞてぞ白昼によれぢ。絶
の猪口は道てくゝ皆乃義るれば。加勢なし。終
いごの気むらり。弛くてつそ。人数は雲霞のご
とし。半時計そもてるひしが。敵も人も引退く。
明に至て。山角上総守。父子三人門とひらき。
切て出。敵を追うけ。百余人討捕るもり。闇の夜
なりけて、道やく、方角をうしなひ。水堀に
入て死せる者千余人。漸夜も明ぬ。[illegible]の覚へさら
なちせり。然れども小田原籠城百余ケ日。弓鉄
炮をくせめそとかふとも。是は終に敵味方一
人もそくへとかもせども。然に夜の戦ひ
に。敵は家康公家中。井伊兵部少輔。城
中には山角上総守。父子三人。武士にはらさん
で合戦し。天下に誉をえ。後代に名を残せり

〇兵法勝負の事

見しき昔天正のはじめ。根岸兎角といふ。
兵法人。相州小田原へ来る。天下無双の名人

とぞいへハ、もし其者長高く、髪ハ山伏のごと
く、眼ハ角ありて、物いふごとに常ならぬ魔法
をこなひ、人をなやめて、誠に天狗の変化
といふべし。弟子共それ〴〵に其者立居に付
ても勇心の祈りハ也、然りて未だ留伊兵衛
と云若き人、拙者の源でてらぬさまならぬ
しと云ければ、悪角やがて組んへまゐるべし。我ハ
うそなるまじといふ。伊兵衛閉口しけるが、やく
さ悪角が剣云ハ、是非に及ず。木刀を杖にして
扇子を、悪角と討べしと云、老人やがて出ける。

なるいらんぞとて、兵法太刀を捨、それしねき
ふりしもや上を見せ、下をと見せ、下を見
せて、上を切。武勇の智謀ハ武士の名誉也。然ハ
病が臆病者といへども、それぞれに生る益あるまま
じ。殊又兵法者が扇にて打まてとも生ずハ
名まじ。かかりなしに命をすてにハ捨給ふらんやと。
いさめければ、伊兵衛ありがたく思ひそでまかりぬ。然るに
陸奥守氏照ともに文武の大ねがひ御下り
ハ悪角と申兵法人来て世にまれなる
微塵流と名付、人ごとにむかひ、其者の計わざを

見えける者なし。是愛宕山太郎坊。ふかく來て兵法の秘術を傳ふると。申なしつたへし。さ
れバ小勝事を爭ひ。あやしめしらせければ。終に古志
かるべしと云。陸奥守申て。昔楚の項王。兵法を學
びて。よくは一人の者なり。然れ共是ハ一人に敵對を。萬
人に對する事をまなばんといひて。兵法をならふ
をならひ得しかど。猶又齊の宣王。勇をこの
む事を。孟子にとひければ。孟子答て。劍を
撫て目をいからしていはく。かれいづくんぞ。わが
にあたらんや。是ひつぷの勇。一人に敵する

者也と云り。今惣角が流なる所の兵法。是
然ならず。大勇といふハ文王武王などの。一たびいかんの。亂
を治めひつげ。紂を誅し。仁政をおこなひ。天
下太平になりしかバ。是百千万人に對する大勇
なり。然バ大勇ハ仁義よりおこり。又小勇ハ血氣
の志よりおこるといへり。稽古しぬれど。仁人ハ民庶
公の次男也。世にひそかなる文武の達人なり。
天正十八年。秀吉公の爲に切腹し給ひぬ。
法名ハ雲院殿透谷圓公大居士と号せし。然ハ後
惣角今武州江戸へ來り。大名小名に弟子

おほくありし上にも鶴のおとし。爰に兎角
と云人ありて、云けるは。先年常陸国江戸崎
といふ所に。諸岡一羽と云し兵法の名人ありける
いにしへの飯篠長威入道にもおとるべからずと
いひなしけれども。終に土子泥之助。岩間小熊
根岸兎角と云て。名をえたる弟子三人ありしが
者共兵法に力をなげうち。昼夜付そひしが
いくほどなく。諸岡重病に臥。存命不定也。
兎角は病人を見すてゝ。逐電せし。残る二人の弟
子。指もふりて兎角めを討んとしけれども。行衛しれず。

とおもひし師の深恩を忘るゝ事。仁義の道にはづれ
いさゝか神明の冥慮にもそむきて。師の罰のがる
るまじきぞ。さぞくるへしと念なしは。かねてはかるべき
をとし。矢をもとぞうけゝる。二人は力およばざれば
刀脇指を沽却し。一衣までも代がへ。医術を通
し。三年看病をといへ共。師の諸岡終に死
せり。兎角は江戸にありし事。常陸の弟子
両人へやすからずは。兎角が命わやうしと云ありに。両
人はいとまをこひ。是非に江戸へ入。兎角を
討べし。是上師の怨をはらし。秘曲をかまへ

微塵流と号し。兵法流行する事。師にも草あり
げなく。さぞや思ひしとおがまん。天罡のが
名べうしが。さて木刀にて打あひ。互角なりしが
だんを。浪以にはしも心をわつてべし。組うまき一
人を二人して討くべくまちしがしども世の中で
と避うしも。殺しがたきとは互角して勝
てよく知れお人が中ねて国をとうりとてよ
丸ある者。一人江戸へりべしと定め。小熊国に
さり出て江戸をさして。りころの助は国まそく
まり。ある日を経さし。鹿嶋の神りよまりて

願書をこめ奉る
敬白願書奉納鹿嶋大明神御宝前に
右心ざしの趣は。それがし老子次郎之助。兵法の師匠西流
諸岡一羽と云者より。敵対の弟子あり。根岸兎角と名
付る者。師の恩をわすれ。きをもつぱら執せんとも。今
武州江戸にまかりて。私曲をなし。あまつさへ逆威をふる
ひ。当年よりてかなはざれば。討んとそれがしの和才
子。岩間小熊。江戸へ上せあらしをり。かざ願はくは
く。神力を守りなかれ。望をとげさせたまはんぬりよを
いそ。二人兵法の威力をもつて。日本国中を勧進を

しやう社破損を建立しまつるべし。若小熊利とぞ
志なふまいてハそれがし父かれど雌雄を決すべし。
子は一ツぞれがしまくるは迎く生ながら社へ坂
鳥神前ゆく腹十文字に切ぞくをとり出
悪血をとりて神垣をあらばく是わけ小その悪氣
ご感て末ニ氷劫社の寶をま物となす。野や
千の栖となるべし。すべて此頭ま毛ぷ私欲ニ泥
ビ所の恩を謝せんとしと也。ぱらぐ神明ハ此様
ミれ〻みけのなきん御照

文禄二年癸巳九月吉日　太子泥之助

と書て宝殿に納めけ。竜にゆりぬ程又小熊も
江戸へ来を日に継で急でさくる。終に小熊江戸へ
来るを見るにかゝ男ゆく交黒く髪ハ多ろのごと
しかりし。ぞかつく生ひ立る肉しり眼さしめくさ
織に名かし知て居る子小熊なり。此者葱角ぐるす
とハ沙汰せざして。小織の太子。大橋のりしよち
れを云るゝとき八兵法ことの人もわるよといて。
とも仁と勝負を決し。師弟の物と定むべし。文
禄二年癸巳九月十八日。日中に無双岩見小熊と
書立り。葱角が弟子数百人わりし此れを見て

あくさ為つめが札のなそて櫓が。天下にはかくれなきさ。
惣角に戸をたてたてるを殊くなそてなるが。志をそて
至ゑもろが先札を打きもてよとて小熊をハ易わひ。
手で櫓りそ打合せとのしるをわるあれすぐちくやて
愚人家の虫能く火にへとぱ小熊なるべしぞ一
うちなわき打ころし。法人にはん見せんと致云し。
此棒も目頭へ此義と上。則丈もしへ数人出さる。
此年行藤づしの高方小弓述を持て鉄固し
数人の力腕指を訳り結ひねバ。数人もしの東西へ
出る惣角ハ矢節の小袖にはぶる面々とのめしられくてり

むかしを着白布をしめてたもと紀りあげ。足なでここ
らへんぢをもささ。木刀を六角にぷくなかぶ作り。鉄
丸く節おびをしてしっかりに眺をとへぽ毛を撓りかぜさ
拵へ出る。小熊ハ嵐久の木綿わすせりあわさきの
木綿もかいを着。足をもとへさ。危が差のうく。
常の木刀を持出る。数前よりすこしかり出てちいあの
木刀をもちと打わひ。たがひに押しんてとしがいか小熊
惣角をさけしかさへ押付。行足をされくのさうさ波の
川へかつえとなくしてなり小熊ハもとまふもと上さとせ
えしがいの仕合にて出合うならば小熊へ涉法をさる惣

角ハ此ま一亂のもとゝなるべし。それより雷電ともに小熊ハ
天下に名をあげたりけり。並む見物せし人々。人群
集なせしかども見ざりけり。作花け泊し給ひけるか
此者どものきそひを見るに。木刀を脇に提。両
方ともに川で打合ける計なり。両人
振この太刀を知といふ人たり。極信にて両人の力を目
當ありて切ありかの太刀ハなまし。知れざりけり
下総の國に有りし塚原卜傳と云兵法者なりしが
是弟代の名人。末代迄をいて卜傳が一ツの太刀といひ
なりハせりて。いまハ太刀の名譽を天下にとゞまる

両之一刀と知れたり。但一刀さするといふとも稽古
なくして。中分の人ハかなふまじ。惣角も
小熊も名人なればこそ。目がけの寸尺かまへ
流まで。両方の太刀中にてさとゑ
も木刀かごま。ざる手をも。籌略なり。勝負への
なしひ一方ち。一方まけ。ぞ運命の厚薄
小さへなり。されども惣角に猶乞へ押付られ
川へおとされしハ。小熊よ勇力をとりけるなれ
かるべしさりけれバ。後に岩間右兵衛助と
云人。是を聞て。是にれ武勇の内に加へり。

力わざをもつて勝負をとげんとしける処に。小
熊ハさく西より出。慈角ハ東より出向ふ
所すでに近所に立。岩もくづる程の力士なりし
が。互に見合て。いまだ勝負も以前に慈
角手をつかねて。二番めもされしを不審に
おもひ。其後世に云事を聞しに其後守云ける
其小熊右に太刀をぬいたのを見て頭をな
でわざと小慈角とともにたがひに慈角
されども云て今ひげをなでゝそもそも人々
さうげの事しわられけるが上慈角退散へ

向て頭をもつてつくづく勝事をとげん運命の
ほど前世なれば慈角ハ大男の大力なる
されども小熊とわたりあつて一打に上陣はかまへ
ゆらり小熊ハ小男なれ共無力なれども功者なる
故相打して叶ふべしとも則妙なる技を振じ
下段よりつく葉のごとく慈角一打とくる
所に小熊ハつと清さ給ふと桔梗の御
付ければ腰より下からずんば慈角
川へさらさ波に落けるを見て慈角強力
と其のことし是非の進退をうしなへ共

盛なるくみとなり。是血気の勇士といひつべく。
其上にわづかなれど小勢ハ項王がいさめるを志し。
張良がはかりことを負ともに敵はいくさをこれ
ことぶれハおこつてども。柳の枝よ雪おれのごとき
ごとし。変動はのみかし敵ゑよりて将兆
よりものなり三略の六韜。小勢が兵法ふくるそひ
わきまへさせしされし

〇三浦三崎の地景をくれ見るまう
見しハ今。武蔵国くの名所旧跡と云。
相模の国。三浦三崎よ夜さりの名所なるべし。此
名所旧跡よの世古昔よりもまれなるもとのへども。
宋代の謝ゑく多くの人稀なり。されハ池の名所旧跡
なりて千金あるく一毛。三崎の名所也よしより
とかく見をかしざ遊し。云景を復えたる。山
海の風致大湖の万景かもちくぬべし。此三浦を
三崎と号する事よいはれなきにしもあらず。
相模国三浦崎ハおよそ蜀の海中へさしかかる
ひび出でり。又東より安房の国。次の総の海中へ
出るにも舟乃渡り八里。此内海よ上。上総。下総
武蔵。此六ケ国よへ海わたり。撫又るより伊豆国。河内

崎は東の海三浦崎へ出向ふ。此海より十八里内海
の浦浜ぐさ。小田原通合わるゝ此三ツの崎浦。
大海原よ出向て。たとへバ鉄輪の三ツ足りよ似さ
里。然るに三浦崎ハ三國乃中さいひ。当面へ向ひ
在るゆ中を正とし。三浦崎を三崎と号く。又
一説にハ三浦崎城ヶ島より。わたりが崎。御前が
崎。離が崎と号し。三ツの崎を崎わり。是れよ三
崎と名付らたり。又り鴨の社の氏人。菊名文長ゆが
東国海道の記ふをとえ乃つき崎。三浦
の三崎などいふ浦々を行て見れバ海上の眺

め。氣色をもよほして。おもしろかりしかバ。面白
き所なりしもをしもど覚ゆと書く
歌よも。三崎が沖の波まより。立出る
月の影のさやけさ。と詠ぜり。万葉よ
芝付能三浦崎奈流根津古草。安比見
須安羅者我戀女也波。とよめり。此二首を相
模哥なりされバ。出ぬぐりえのはさ崎と記し。
叔又前りよ芝付の稱はとましけれバ。つぎの
草ぞよ本の荒磯よ多かれバ此二名志てよ
近年江戸よりの領として。番所有りて

與ゞ嶋へ渡り。鎌倉さいことは是なりとかく。
緒にひぬ。和賀江のはさ嶋志しど。組城ケ
嶋の異名とし言ふ。万葉より
聞明須摩鉢御崎農浮枕。家嶋毛渡。
冊伊久夜布太天然。是ハ筑前也。玉葉ニ
夕附日。播田のみゆさと漕舟の。かしかふ
引や武庫の浦風。ごもしハ摂州
蜛くめ貝をひろふと紀の国のゆらの三崎
小野目くし津。是ハ紀州
さゞ波や小松かり立て見渡せバ。三保のみ

ゆさの田鶴しまてくなく。是ハ上になりぬされバ
三崎と云名ハ。相模。筑前。摂州。紀州。江州の五ケ国
よしともの舟わかけし。是よりて舟書ごとに
みな書をもてし。撰せられたる五ッ崎とすること
みな名所ハれけし。紀崎。筑前ハ
いく世をは経りてみん紀崎の松れ千年の
ひとつなりね。礒崎わつと
礒崎をごさてめぐれバ。近江海や。あその
みるとなり田鶴さハぎなく。星崎尾張
星崎や。やそつのりさはいさり火乃かのこ

しらとやむりふんと。出島摂州
もり滝ぐらで島めぐるか夕闇よ。母子乃
総人と枕かをれなり。雄島が浦陸奥
松島やとしまが島乃夕霞かとれびさ波
行わすりのそくるハ。麻島浦常陸
浦人も秋やさむしりとじわられる。麻島が浦
乃沖津しかも風ぶ小島が浦越中
とともともぴいさふ小れふらん橘乃。小島が浦
乃山ぶさの影。荒井浦武蔵
くさうけの。荒井の浦乃かさ島とみんつや。

寿が山浦こゆらん。清見浦駿河
いはあや。清見ろ浦のみかの浦。ゆきうけかんえ
清ぐ物おりひもなし。岩浦備中
をき茶をさぐ世のうけとぞ久しきふれ。まぶ二
駅なかぱ岩浦乃松唐浦近江
よる波の果ツの名はみどりなる松ぞ残る。
志賀乃うら崎。神浦摂州
神浦のわら浦をみんてもぞ波立ち河こをゆ
かんぱ紀乃ハなし。多祜浦越中
さそごの浦。ごのくれしけをほそくぶ波。ささささ

どしめべちく悲しやも。月出浦わけて
もおくと曇なれ世をうつふから。月でが淵
乃。海士の汐舟。蟹島が浦藁浦
志ほみてば蟹浦が浦のさゆら暮にぞ浪こも
風のかるぬ日ぞなれさ。おぐ浦浦奥州
おぐ浦浦みつの小浦とよぶら。浦さいふ名れわけて汜
しかるし。然ども三浦三浦の海上に城ヶ島と云く。
大きなる浦わらば浦ハ三浦湊の前に陸地を定る町
もなれ。東西へ三十町程长く。撲さへうらひだ出里。
又东の陸にとさま。長那浦。尾が浦。犬浦といひく

由来ハ三ツの浦わり里。ば浦城が浦の三ツの済
小出白ひ。へ海ゆく。三浦の城の山岸をめぐり。
うさぎ川まで。廿町程の入江わり。げにあ舟数
志づむれども。られ真。舟。櫓を掛く波ならい浦
里のうちまでやすゆ。網引ども。網子とてなずる
海士のしわざ。に立さなどさわぐ。沖の群をとも渚に
わさ波女子乃の。鳴うし。所く数てくはうしろの山
廿は。海南大明神也。ハ氏神。神宮寺の薬師也。
貴示の法守。古来の尊像なら。稲荷山の森志ぞ
里。意もなくしせぬ松風は万歳をよむふうとある

まくらかゝ上の御堂。東光寺の阿弥陀ハ恵心の作也。
日本武尊乃霊像なり。光念寺。観音寺。法満寺。
南蔵寺。大宗寺。西福寺。瑞恩寺。諸宗寺々の鐘銘
のよしをとゞめしるし。是かんでうの寺院よりもとく
まさ乃てら。向ケ崎乃大椿寺ハ。由来あるの古跡なる
也。観世音菩薩を安置しまつる。霊験あらたなり
また海もとれ。三崎より八丁に渡海し。さかのい
と流もなし。二世の願望成就し。年礼乃袖ぬらす有。
暁乃鐘乃声よは殊勝の泊船。舟ゑりをさまよ
桜又城ケ嶋の致景。是絶て甚しそなりしるなれ城

山の紅葉ハさながら紅の都にて。錦をさらすがごとし
ごし古哥に
鋸山の紅のさゝまハんなき。海士も迷ひとらう
ならうれどよみしハ。此和りて乃詠や。南の海辺
母は大浦うら也。象潟江の浦ぐさそら。西をのろろ
みなるむしまハ。箱根山。足柄山。富士乃高嶺よかられ
白雲ハ紅しくみてなりしろや。東よもろへハ。上総山。
安房山の蔽もぐさ。龍の洞よわ。それ其る景京ハ
昔なし。永禄八暦。源生上旬の比かいへ。北條氏康に三
浦浦山の桜花見物の本に浦しるまよ侍て。侍

豆相模の舟共がごとく見え小田原の浦よりかくる氏
康氏政の舟よりさ見れば其役の人々は海陸から海浦
の遊覧の為め渚よりそひて舟をとゞめ小磯大磯江
の島腰越小坪森戸秋谷佐島長浜三浦津久井
代諸石乃浦々とこゞめく里陸地を其役の人
人は濱ぎはに汀よりそひて舟と陸と言葉をかは
し珍具の遊覧なり三浦の城は永正十五年の秋早
雲入道氏茂舟具なり氏茂なり居城と定めし
此城は荒井と号く豊目城ケ浦へ波海をさくる
苑とは見物詩哥管絃酒宴舞楽の遊具

わづかに近しかば遊びしも三月の塩は常よりまさ
ことく引干潟となりぬれば小島は舞を
みるを遊びしてよそにみちぬれば松島とは
乃嶺と見舟は走ら潮もみちぬれば
皆人は汀乃汀にならび居て渚の磯
浦より粒の盃を浪よりうかべて
盃みちぬればまた来るとも又詩をうたふ
き哥を沈吟し雲の海色の興をすゝめ
世り盃をあはてて前へ弁ずれ来る所に句
出来る人は盃をとれわけて吟詠し酒をくむ。

句紀をとらさん人は盃をとれりもどりて先さんへざる
人を行り織に流事の注雅具そろし。昔から
国には例あり。曲水の宴と云事は。桃乃花さ
かりなる。川邊の汀に。詩人なる居く。水上よ
里盃をながして。其日の興とりなく。詩の妙
なるを詩に作る。我朝にも中古は。学び
かしかり。ども奇丸興きしハ盃とるや。詩に
天千花酔と行り古奇ふ
盃流。あさの川邊もなかさむや。宗さん今
三まきし。見ひらんごよめる三崎。山海の風景。

桃よとなる成。民康民政三日に滞留して小
田原へ海城し給ひ。当浦の致悦のべたくまた
あらしまて

○相摸室蓬山旧跡の事

見しき今。三浦三崎。磯山乃風景。と浦く
の氣色までも。画をみ詠ながら。途に画き吾
妻鏡の文書と見侍るに。三崎室蓬山の地
形。世にあくそうあれり。右大将頼朝公山庄を
立られんぐらい吉日とえらび。建久五年
甲寅八月朔日二井三浦三崎へ渡れし給ふ。

是三浦の津々をいては山庄と云られん城也。
小除前父子。上総介義盛。小山五郎宗政。三浦
兵衛尉義村。佐々木三郎盛綱。梶原三郎兵
衛景義。足立小次郎行光。小野寺太郎道綱。
伊豆守義範。以下佐竹を出し小笠原わり。秀村
て以下河邊庄司行平。小山七郎朝光。和田左衛
門尉義盛。和田左衛門尉常盛。海野小太郎幸氏。
藤沢次郎清近。梶原左衛門尉景季。愛甲三
郎季隆。榛谷四郎重朝。橘次公成。里見冠
者義成。加々美次郎長清。以下也宝蔵山に浦

出し見られは瑞巌寺を始めとし給ふ。三浦介
義澄。ゆんをを饗応しけるとかや。珍膳を
尽くしつゝ此所の眺望は。浦の白波青山に手
なよそ地をいて日本無双ときく。又翌年
己卯正月廿八日。将軍三浦の津に渡御し
給ふ。船中にて旗を具おけしてありしかは。三
浦の一族ぞ謳歌をしける。同廿七日还御也。
又将軍家の御労いさゝか平癒ありし八月廿六
日は。舟にて海浦を。三浦の山庄に渡御し
給ふ。供奉人あり。今度義貞より以下白の

後ハまづ此景よわろしといへども。其当国の風景にも
よりまされりとぞ此國悦浅からずとかや。猶又三
浦の前海。城ケ島より長ハ桜花咲みだれ面白さ
磯山乃気色たとへんかたなし。是によりて頼朝
公ゟ北条家公。代々乃将軍ハ三浦へ毎年遊覧あり。正治元
年ゟ出御し給ひ。実朝将軍。三浦の桜花
御見物あるべしとて。建暦二年壬申。三月九日
尼御台とともにて。三浦へ入御し給ふ。建
保三年三月。同五年九月。安貞二年二月廿
一日。同四月十七日。将軍頼経の御遊覧に小笛て

あり。猶又寛喜元年己丑。三月十七日辰刻。頼経
将軍三浦の磯山なる遊覧のため出御ありて相州
武州をはじめ御供。駿河乃前司御船をとりよせし
海上にて管絃詠哥あり。御家にて桑門射遊女
を召しもなし給ふ。一興まさかりさし。さんかうもてなし
ありし。異なりしことの外しきよそ山海のけ
きもう海上の眺望を設るべしとぞとがめさせ給
同十五日に還御也。同二年庚寅三月十五日。頼経
家。三浦。磯山の花ざかりは。頼経将軍の御ため。武州六
浦の津より里船よりされ。海上にて管絃あり。

若宮の児童にとめされ。於中あまく詩うを詠じ。連歌を作りて称たる相州武州以下あまたの。よりて路主駿河前司ゝとなるれまる者。善道し義行くさもとと云事なし。我国の武蔵の森州相模守州房。基繁親り。湖行ゆく秀句を献ぜらるとも云々。滝余数代の将軍。三浦の御所よ名を得く。観もの御遊覧の人あるべし。右の趣。京くて見の文言を写し作る事述べく当地の変すぐれ名るよりて。執権云をもち九代代の将軍。磯山範の時氏をともさせ給ふ。御遊

浅ともかゝされ。毎年三浦の津へ渡御あって詩奇哥緑の御遊ありとなりし出くとも一への眺望をまはりる城の入海より向ケ浦城が旧跡見ゆるへ。相見ん塚りる石。細代油壺。三津。長浜の浦とよい千鳥が磯乃舟を作なぐさかせむらもに。水底深ゆってそらぐひなき湊。かつ国までもやすさ里。天正四年乃浦の三度とう唐人へ民家の虎の評判をいうでさり浦の浜乃。二年目の戊寅七月二日よ黒舟三浦乃湊よ名岸も。唐人は湊をうぶ名舟子渡海なく元せもらしとぞる

それより此舟もおほく見えて縦にて氏政の検使として安房守なるさいふ人三浦へ来る。唐と日本乃口遊交合。賣買乃新ゆかしくぞ見えける。されば在家千余宇立ならぶ。鶏鳴狗吠相ひゞきても流よそ町屋とひとし。孟子の云る家をおもひ出せり。先年三浦乃城ハ北條義澄より氏親居城とせし。當浦関東無双の湊なるよし聞て氏直并大将。梶原備前守をはじめ數百艘の舟をかけて房州里見左馬頭義頼を敵とするなり。舟に乗て渡海し戦ひ在けるが氏直退散

此家康公ハ舟大将小濱民部左衛門尉。向井兵庫助。間宮虎之介。千賀孫兵衛以下清湊を居住として當地繁昌古今なしとぞ

○笠原新六郎氏直へ逆心乃事

凡しむかし北條氏政と武田勝頼弓矢の時是勝頼の城ハ駿河の國興國寺と三枚橋に有り。氏直の城ハ駿河の中泉頭長久保。戸倉志御前ケ下に有り。泉頭の城にハ大藤長門守。富永猪之助。笠原新六郎を頭として。是将大将として八市南。高橋など云勇士をのぼし

爰にまた長久保の城には清水太郎左衛
門尉城代として伊豆の国の住人清水上野が
男。関八州にならびなき大力也。氏政きこしめしが
の秘をかんぜられ。戒冑に具して太郎
左衛門ちやうど前へ八寸まはりの麻の角を二つ
なげ出されけるに二つの角を二人にてはさみて
引ければ。氏政も感じ給ひ。諸人も奇特に
思ひければ。太郎左衛門尉奥州より出でける
岩ゞ鶴毛と号せし駿馬をわかく尾をきわく
までもゑすわまり、強馬なりし長久保
より鴻巣の嶺へは上の五里程あり。此馬のゆへん
なれば申の時と常に強をさし卯の刻に長久保
をたつて鴻巣を目がけむちを打て晩にも帰
速に馳せ行こと恨なく進物乃霧八谷鳥羽乃雉を
取て絆の紀の羽を飛かうらし。鴻巣の嶺へ帰り上る。
いきもたえせむ引返し。則刻長久保へ帰る事
あらはせとそ云ければ名を鳴る也。二年北条義
氏とやらん条氏政常陸の国にとつて合戦の
砌太郎左衛門尉岩ゞ鶴毛乃駒に鞭し。
黒糸おどしの鎧に白八つの黒かふを旗なと

さし樫の棒を二丈あまりにして切六角にけづり
此棒を持て猿臂をふるひ。敵軍勢の中へ
分入て。棒の石づきをもつてのべうちにうちくだき
其妻女のうごきを。一掃ひにあまた討ひけり
ぐぜられおしわられて死する者。数を知らず。
賊兵のおそるゝ事はなはだしけり。猛威をふるひ。強
どうどさ。敵を打ひしぎ。名をえたる大剛
の者也。志所深きは大名越後守在城也。是は
三枚橋のほとり海浦といふところに。海賊と云が
むれある也。戸倉には宇佐美新六郎居城せ

し所へは杉田尾張守入道が長兄也。他家を次ぐ。宇佐美
と名乗る。然るに三枚橋と戸倉と。戦ひ度々そも
されども三枚橋の人数。戸倉へ働き。分捕する名
もなき事。数度に及べり。民部少輔ひとしをやみなび後
ひ大将一人武弱なれば。主従深く。疫病にて
てぞそれを死と。後にすれば。新六郎やゞ生ひ立
なりしかど。謀叛を企。天正八年の冬。勝頼に一味
し民部へ弓を引。同十年三月。勝頼は信
長公のためにほろび給ひぬ。然時に民部宇佐
美新六郎が。首をとのしるべきとて。父尾

河守入道様々侘びしに付く入道が年来の忠
功に誅罰をゆるし給ふ其後の眉目とぞ申
ござりし。其後出家し。年久しく隠家に
てくらしけり。新六郎と。世にはいひそんじめ。
父尾張守謀叛をくはたて。秀吉公へ申しける
関東へ出馬せられ候へ。尾張守うしろ切仕るべき
よし申しけるによりて。秀吉公天正十八寅の年。関東
発向し給ふ。氏直伊豆の国へ。関八州の人
数打出し合戦し。運命をば天にまかすべしとぞ。
下知し給ふに家老松田尾張守へ申しけるは

籠城なるべし。西国勢は長陣かなふべからず
ござんなれば遠からずして勝事をえ給ふべしと。
申されければ。さめざめとかなはずして。関八州の軍兵小田
原によりて籠城す。氏直運のきはまる所也。敵は
四月三日悪々として責落さんと云事三ヶ月に
及べども。尾張守新六郎父子二人密談して
六月十五日の夜。町中へ火をかけ。松田が口より敵
を引入んとたくみ。城中へ引入べきよし。遠物して
ありし弟に耳に聞しに。尾張守が次男
左馬助是をきき。親兄又代々主君に対

し逆心あさましき次第なりと。狼狽をなしけるが。この
左馬助が若年にして民部をそむかせしも見まざ他よ
おとなる所は自害の人也。左馬助はかくありて
なるべきぞれ君恩より大いさなるものなく。父恩より
深きもなし。父子一所に成て君に弓を引なる
も八虐の咎ともかくへし。殊に君と一所になりなかま。
父は敵対せむ。八虐の罪のかるべしと思ずつくされ
発心せんとせん是隠れなし。腹を切くも益なきま
じ。登ゑ唯谷が史記に忠臣は二君に仕へずと云り。
それにも家の臣なる者。力をむじあさきなれども。それ

人たるのみちは。義をもつて利とせよ。利を以て利とせ
ざれば。若親の命をも雑言とそむかれは。君の命は
なほまさりたるを上城中の人民。幾万人かある
も皆命をかかへさん事。天神もあはれ
みおはす天誅のなさけなからんや。と民部を民部へ
告志らしむる。民部少輔左馬助が忠功深かりしぞと。
信感あり。内目と様さまどに所領ある。新六郎二人。様野対
せし故。敵は民部を志しもとで。松田が旗は白地に黒筋の。
名んくなり。指口は西早門にして。敵は指白く。
諸勢三段までをし寄せよとありしかは。城中

まで通路なし。松田が旗色もかはりて見えし
くれば松田ハ松田が逆心ゆへなりとぞ。法務
力をうしなひ。長陣にて気もつかれはてにし
抑秀吉公智謀の名将にておはしませば專く
にて詰る氏直軍令に従はず。籠城を遂に出し天
下を平定し同年の秋一門家老共こぞつて一
同に高野山に登り里。同冬山を下り里。嵯峨の
里天野といふ所に居住し翌年の春秀
吉公氏直を大坂へ召寄られ対面ありて。前約を
ほどなし給ふ所なりし。文禄元年十一月四日氏

直卅一歳にして大坂にて逝去也。法名ハ松巌院
殿前左京兆大円徹公大居士と号しける。関東諸
侍秀吉公の命にて皆ほろび果にけりと並北
かゝりければかくなりしも又。氏直滅亡まで凡
秀吉公の命によりてをさまりし。清盛公の時代より。
源氏おこりて三條高倉の宮滅亡しハ伊豆守仲綱
が馬一疋の恥辱より一門をことごとくほろび果て
里見氏ハ又氏直ゆへに名をえて。大ぬきをりしの
軍の末は此言語の法にしもなく。新六郎が
めぐ恵云をさゝ捨語のしまずつきかり。恨

に付て。恩を忘れ。情よりもかく命を失ふ。是
よのほかに見えなかりし家をとりけて天道にもれ
し。なほ思ひ一書をとり。氏直の滅亡秀吉公のため
あはれなりし新六郎かうらなりと云。或人云て
やく人の滅亡に付て。是ゆへかれゆへと沙汰しける事。皆
ひが事なり。古人の云。人のおこなふ是非は天運によるが
ゆへ天のあたふる災は人のさけんとするにかなはず。時
刻到来とやいはれし

◯庭林房一休巫の事

見しは昔。房州里見義弘と。相州小田原氏政弓矢
の時。氏政女房と相模の浦海をさかひ。房州海賊
小船。二艘三艘あるく。閑夜に。相模乃浦里へ夜
をこえて来る。浅ましの里を掠し夜のはかりの内
に。海を渡して浦里に来て夜盗をする。ときに
敵船来るとみえて。貝を吹鐘をならしたゝかふ
通念大欲なれども来るなれは小田原浦へも
来りやせんと用心せよ。天正元年二月五日の
暮がたに。小田原浦に小船五艘うかび来るを
見て。其とき海賊来ると一人云ければ。町さわぎ
動揺し。敵船をみんと。皆人浜へはしり出る。

侍藤も此由を申しかバさらば物見よとむちをうちて
濱地へ乗出しけれバ良小舟をこぎ来り誓願
寺の庭林と云坊主がうきをさし敵船と見え
物せんとまかりしかバ出る所に武者一騎さし招
さし敵船そこさ汀へ馳向ひ是へ一陣よするを見
出でたる二かけかりしさらば相模の國の住人ある山尖大膳
大夫也舟をこぎ付勝負を決せよと名乗ける
是も艪舟をかく何事ありんと言もせず誓
願寺の坊主是を見てかくうきをさし上是へ
二陣よりも出る一かけしかさの法師武者

といふなる者と云ふんなでしもあたくも浄土宗
誓願寺の住僧庭林せんとさまをいてハ縁ちんさき
舟を漕付引くんで勝負を決せしと名乗ぬ
入りてどのを引ひて逸散を取民政の流
義へなるく秘法よそとも民政ハそく今當町
さハざなるし何事ぞ枝羽屋江雲の門
でいもく當よとんで汀よ艪舟を又繋浮び
けれと何者ぞ海賊の乗りと門町さハざ侍たも濱
為馬を乗出し誓願寺の坊主かく名乗ハやを
門名れハ民政ゆゑ居こそ庭林が高感を吐

さでん坊主なり。法問もさぞ志りなましんと。奥へ下
させけるに。北条氏政十二才。国王殿と申す。ある日
此よし聞召。坊主一目見んとて待かね参れ
ところに。件の律者。総持寺へ来り。坊主を召て
一定織も。若君の御前へ出て。さめし出されけり。暁
のおぞく云義をもちふべきと。名家非へとかう笠
一寸見出し。ひらきせんをさし。坊主にむいても。君
命下辞しかで。語まりて奥ある若坊主。殿へ
飛て於唐笠をさし上。是へ二段ますぐに出づる。一
ありし益の法師武者とないうなる者とぞ聞へし

去程に浄土宗誓願寺の住僧。岳林也しとき
おそてかしこにござ。舟をござ付引なんで。
勝負を決せよと北条国王殿申す。大きに
よろこびて語ひをとぶらはれ。ひるびくれより
物を語ひけるに扇を下されけるを坊主今
江戸へ来りて。持ち来るのよき寮に。岳林房
と名付ぬ。しばらく庭にありしと

○小田原氏政没落の事

見しも昔。小田原氏政と云は。文武の達人。猛強の
大将なり。関八州に威を振ふる。弓馬の道に於ても。諸

去りとハ義によりて命をかろんじ名を惜む
死をかろくせバ異国の樊噲ともいはざらんさ
されバ氏直宴會の末までは秀吉公武威
もれてずしさるをそれバ小田原の城をおさへんと
成給ひしかバ関東諸侍ハ宴にさ遊殺(?)て
箱根山のふもとに隠しおきて将揚(?)のこゝろの辞(?)
ふれ(?)へるがごとし用ゐるこゝろハ嵐も虎となりても
ちひげ(?)るこゝろハ虎も猫となるといへ(?)ど
東方朔が傳ハことにはなはだしかりし宴(?)ぞ
あんじておもひとくゞく時ハ勇者にはづかしきと云

事なし漢の士卒ハ勇猛ハ大将の心によれること
旗はくずれ早雲よりこのかた五代の繁昌一時に
滅亡とおもへバあはれ(?)なる次第也関西は八州(?)を見
て関東の腰ぬけとぞ川に奪はれいさゝかの地を
もたバ天にせぐゞまり地にぬきあしして三界広し
といへども一分の立所なし数日をへりしといへども
一日を送りがたし国足(?)没人の賤しきわかと
ならせられしと面をそむけて先(?)や関東
者にあへる(?)事ともなく爰やうしろの
物かげに居たりしハなどころにまよひたる輿(?)

なれ氷はいさぎよくみえけれども愚老もか
周家鶉ふ城をうつ生國あれバ家しさは。三浦の
山ざかへ移りて人々をわかれさうて、おもふしへの
倭将は悉く今うれこぞり居くうさぎてさのそ
かくしるか。軍のさハめといひおぎり。まてハ恥辱を
すごさ。死てハそしりを残す事。無念限なし。
主君武臣ハ虎の市に刎を見し事の古例
に寅の日を見ひ語ひしかは。
虎とのゝうちひられしハむかし今ハ龍
なりし世の中。是宗尊親王の弟。かの上り

成ぬ吉凶ハ人によりて日によらぬものとぞ。かれ文今
ありし末うれ給ふるや。又一人云けるハさのこと
くるしき事わりもなし。虎は付くのたとへ。古語
もありく見てきさう。猛虎深山にある時ハ百
獣ふるひおぢよ見え。かんせいの内にある時ハ尾を
ふりて食をもとむとぞや。其のし見
生死の道をしりぬひ生ハ死の始也。むかしもとい
それなしひそうし。呉(?)胡の事なるか。呉国
越国とたゝかひの國ほりで。くの王とハ
といひ。越國の王をバ。白賤(?)といふ。呉國の王。

國をわたしそひぬる時ハ呉王討まけ。其時ハ越
王を退治し。あやうくひ家をかなしぶ。然に越
王うちまけ。生どられ土の籠に入て月日の
光をも見ざりしかバ。その間に年月を送り
給ひしが。越王呉王のせうべんをなめ
まいらせ。[illegible]かたきによりて。越王の
命をたすけられける。呉王の臣下に伍子
胥といふ者申けるハ。天のあたへをとらざれバ
かへつて其とがをうくと見えたり。越王の命
をたすけ給ハん事。たとへバ千里の野

に虎をはなつがごとしといさめけれども呉王
用ひ給ハずして。越王を國へ返されけり。其
後越王世に出。呉王をほろぼし。会稽の恥
辱をきよめし事のごとし。又一人云やう。
それ今伍子胥がいさめし諫言を[illegible]
を[illegible]。相模の國よりおこりしが家と云
名字なりし古骨に
名字しおきて。虎やともいふ東路をあゆみと
[illegible]給ひしが[illegible]ねたる。
當年ハ天正十八年寅の年。[illegible]を出す

し七月六日ハ寅の日にて当国まゐり。年日にてそおか
かゝる寅の年寅の日にて民部をとり給ひしが原お
されさかゆる。虎ハ千里ゆきて千里かへるといへり。天
のめぐみのおはするべし。根ふときさまあしかわり。保元
のはじめまでハ。源平両家左右の流れむさぼりあひて
朝家を守りしが。平治元年に。源平あらそひ。
源氏打まけ。左馬頭義朝ハ討れ。三男右兵衛佐
頼朝ハ生とられ。命たすかり。十四の年。伊豆の国
蛭が小島へながされ。伊東と云源氏の里にまし
て。或時ハ狐にまかれて別をとられ。或時ハ山上へこし鼻をと

いろいろ。延命をたのまず。歎いて二十一年あかし
春秋を送り給ひしが。後ハ世に出て。平家をほ
ろぼし。元暦元年。君をかたぶけ。征夷将軍の院
宣を蒙り。建久元年十一月七日に上洛して右
大将に任じ。一天四海をしづめ。ならびなき末
もなかりけり。然ども時政氏照二人計あそ切
腹し給ひされ。民直君をもとめ。一門にハ太
田十郎。小除七郎。同新太郎。同安房守。同
舞鶴。同左衛門佐。同右衛門佐。此人々の子孫
末葉までも。今かうしへはしりし世の流人と

威てハ彼くにれハもとより目なき國によもきなれ
ど門がらを中おなじくは一人世に出て天下を守る
ぐへき繁昌の恥辱を清めさらんが為乃ことくよ
身のおりひの行らん時ハよろ門を捨て家名のが
きよしとひへり。若隠たりに此度命を捨為にふ
きわしもぜひて天運のたすけ門べき形を報ゆべし
ひとへに我も人も命を全く持ては前の恥を
すゝぐべし。因果ハ車輪のごとしされハ死
ぐり行ふハあちやうべしと云。家根二左衛門と云
老士ゆへて教る言を耳わりに残しむべ

しかハ此後乃事もとハ流りに世りに捨れし段
並公是世に乃人治ひし秀吉公も家の家名を
乃宗とみるにもてなひねいにまちしの秋に
わたくしも門へき逆ひの前の是非ハ是非を
よ非也かんるりよれさるあのなしと歎く
もうひなるべし

○犬乃草を海道に捨る事

昔しき今人の物語を聞きしてまでくれえいを
さひよさとしゆりハ家によるを知られバ古
哥なり

梓弓(あづさゆみ)はるのすゑにもなりて風かれ、のどけさに
いのちのかぎりしかんぱ風にかへり柳(やなぎ)の異名(いみやう)なり。
新古今(しんここきん)なり
○此(この)歌(うた)ハおもしろの空なる風吹ぞたにも松(まつ)竹(ちく)に
もろこしひかりとけば詠(えい)じかへし面白(おもしろ)の音(ね)の
みやとおもひ柳を見れバ風かをりて心(こころ)にうかぶ。
桜又松下(しやうかりく)に渺(べう)くめぐるをみれバ風ぞ
かふくなれとみれ此又事さへうかりし得れバ
世上(せじやう)の人口(じんこう)にかかりて人の徳(とく)ハ徳に
大(たい)なるをかゆるハ万夫(ばんぷ)難(なん)をかゆへ人道(さま)を

はてしなきハ万人(だん)実(じつ)と徳ふことあるがごとし。されバ
儒道(じゆだう)ハ根をさだめ修行の双脚(さうし)ぞ
を智恵(ち)ある人よくまなびしんたい紀綱にかはる世
にハ本のまはりをもとめ世のまじはり。さりともに玄
此人のたのをしたがひしくたせる風情(ふぜい)に見えれと記
しもの記さるるを見るにも盛(え)にてくろ古語(こきし)なり
風花雪月(ふうくハせつげつ)見(み)しよふにこれ書(しよ)を読(よ)て世に名(な)
行の身はすへじといへり一切の芸(げい)ハ師(し)道にあらひて。
学(まな)ぶにもおもしき事なし。終に生まれ年をそへくる
道文(でん)をまなびざれバ物を志て梅(ばい)てきるひとなし

愚老若年のころは北条氏直関八州に威をふるひ東
西南北に弓矢やむ事なく上下万人もやすき者な
かりきされども閑なる事なし夜盗も武士の
身と生れ十三歳にして父におくれ孤子と成て
母に養はれしかども暇なければ曩祖の名をも
けがさじと十五歳のころより人なみに陣役をつとめず勝
をえんと廿六歳にして小田原籠城をせしかども
此頃やうやく家をも一日しかも命令をうけつるか
ざるを上様のいとまこふ年を送らん事をも
見ならはぬ業に力をおとして鷲賊に伴ひ
なくて何と過すべき暇あれば筆をとり事をも
かくる事文書を経たるより事耳にふれ
たるを今を筆とりて古きを習へ共ば此物語
り私云を書加へぬれども何となく人の語り
つたへし事を記しはんべるは相違有と云
ふ人見る者から事を書人のあやまちを
海のなかに捨られし物をひろふ者もあるべしとて愚
老はむかしたはむれにとりのこすことも古事は
今きこゆれば世をとう見るとも此海のうちも
くいがあるようでおもしろかりみえとみしもなな

上ぞうしされハ絵帝の画人をとがめることハ
眼乃紙なら移をと云事ハ耳の徳也されバ
かるゝ事おそれとりよりをふ御んこと
なし世継序によれバかさ事ハそれハげふぞ
腹ふくるゝ心ちして書されバわづさな
きをまねびれど泥しけるを推明道が詩ハ
時の人我心の空のしびと吉しとぞ伝さりよし也。
閑をねもんで少年と学ぶと縁りをとり物を見
もろ好きぐわり丹んハ松を見し。楽天ハ
竹を友とし。寧王ハ笛を嘘き。蔡王ハ琴を弾く。

みなそれぞれにわざ。然るに松葉軒がハさわりに依
て。深く思ひ案ぜらるゝに。此見聞集ハ縦バ金を
土砂にまじへてくさ〳〵大の草にくゝミ。海道に
捨をかるゝが如し。それといふハ此集物の中
おいかしへの賢聖乃云葉あり。是金也。又今昔の
人の云葉。文字仮字ひがめたる。私云ハ皆
是土砂のごとし。されバ此集物の異名を。臭犬皮
袋とやいはんか。此国に生れて世に捨らるゝ外ハ無し。
是を人。海道に捨をく見付てされバ。見れバ云さま
道中に用なかりしにとおもふきかへるべし。

土沙ましりて、こがね見るへし。急ぎ土沙の内より。
こがねを拾ひ出し、くさき犬の屍ぞくさるとも打捨。
まことのこがねを見るべし。まことを知せぬ人やわらん。然れども
右の金言を守る人ぞ、おくれぬ人の為よくわかるゝにぞ。是
とりさげる人ぞおかるべし。是を上手に付得るなく
失ふ。是なく、述ること無なるべし。よくよく是記
犬の屍といふは、是なれば金言を拾ひ得べき様なるへ
となり

○悪き小童を友とせぬ事

是れ貧家よりは親知もなく、やしき世は古人
たとしぞわがおさき玉薬今我が力の上りはぢる
まで、老輩となりて、旅へゆきて、友をそへてくる
ある童子をとらへて、ひがことなしを行ひむかしのいと
縁の友となせば、かむりし縁ら遊びさまざまな
るべきことをいひて、かんことなしと云ふ人も
一事なれば、武術は黄薬を金なり。さ言へ
ても武術は家を立つるが、まじとおもひ
せどり問ひやまず、ぜひをせめ、こしかたさまよる
て、の童をなぐさめんとて、狂言綺語のよし
なしごとを書つめて、あるはいひて、さ。讃佛

撰の因ともなるべし。されば又寛政年中世上
のこりなくなる事あれど。画嵐見えやとまりし
わび物語の文字の無し。見えその二字をのぞき
古今なかりし事ども。おしもかざらずと
義を加へ。ども所々の新と。あらしめ候へば
及ぶべき風俗おりしるさ事はいへど。是世の為
人のさかりにもかへども。てをうつすの心となぐさ
めんためなれ。俗語書物も及ばぬ。若き案のままに
て。新をさへかりぬ。経ともいふ古今集に
りすゑへ我とも無ふへやあらんもしかせ

むなふたしかひかに詠ぜし前のものも何らかに
まどしも。古語よ云葉すくなきはわやまれらず
くたさとしてそやなれし。眼前の俗語を
拾ひ。世の物語の中におりひ出るに任せん
えに古人の云葉を書加へ所々あらたむ。云なと
はべり。秃筆をそめ。冷灰の胸次早
懐をあらはす事さそ。俳事わらん。誠に
もらいてひとへに鶉鵠の拙けに似たる後見
のわざならん。豈慚愧をまぬかれんや。あるいはまた
ども人いえるかへ安からぬとそいふ翁は世を

智道徳して人をあしらひ安らかなれバ離
依江のうしわしとも。維れ見をかめそらん。

古哥あり

かゝる事をもなひ捨るかぞやもとさ誰
とは人の待べかりる。冥や無縁の送りあし。
春秋の。霜の夜は眉の上にかさなり。よ花ハ
山の桜の花よりもちり。かかハ狩場の雉子
よりも恐れし。たけき。おり花むを思も。今
薪尽きん時ハあれバ。世の夜を一蕊も。
ただ一息の後をんを待たる速げりく注す。

となり人バさの方あばし。後果を知られバわを
かとおらきふ道むかまりさし。五十ハそぐ
身を住で現ともに。根入ちせいバ身のうちに
五十年の。さをふしひまわひて。何事も一炊の
身の世をとさとりそしてそれに補ふ翁する
あられとハ。節も返とくそくぞ縁とと。かさ
並わまどもに。まさに生死長秋の夢ハ覚也
がつ。浄くありわりかなハ。口もさん待なら
よしわしや。人の人のいひしぞ。と薬あり
も似めぞもりに心の所手時慶長拾九寅の年季

冬後の五日記之早

北条五代記巻第十終

寛永拾八辛巳暦

二月上旬

開板

110X
231
10